

佐賀県立博物館・美術館報

No.64

佐賀市内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947



絹本着色楊柳観音像 李朝時代前期 広福護国禅寺蔵

広福護国禅寺は、県西部武雄市にある臨済宗の寺院である。仁治三年(西暦一二四二年)、武雄五代城主後藤清明が、聖一国師円爾弁円を招聘して開基したと伝える古刹で、現在、木造四天王立像(鎌倉時代)や、絹本着色十六羅漢像室(町時代)などを伝えている。

本図は、同寺の伝世品のうち、朝鮮系仏画の一幅、楊柳観音像である。

楊柳観音は、大神力あり大悲ある観世音菩薩が、衆生を得度させるために変現する三十三身のうちの一身とされる。本図様は、善財童子が補陀洛迦(Putalaka)山に観自在菩薩(旧訳観世音菩薩)を訪ね、功德を問うという、華嚴經入法界品(大方廣佛華嚴經卷第六八入法界品第三九の九)に説く場面を図絵したものという。

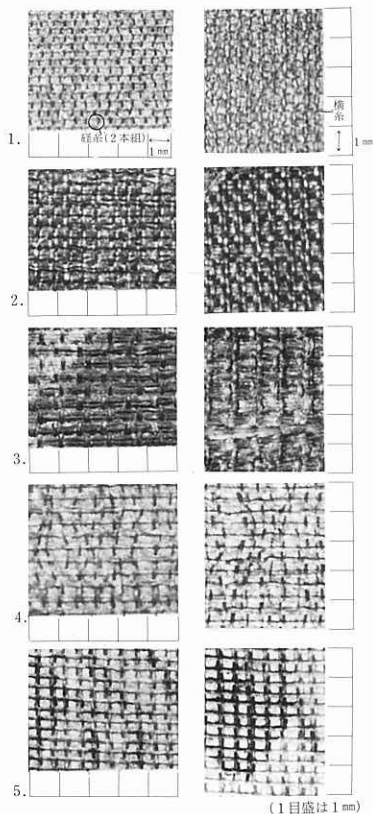
本図には、岩壁上の主尊が正面向きで、主尊左下の善財童子と向かい合っつていず草駄天が主尊右上に描かれ、俗人が主尊右下に侍立するなどの諸特徴が認められる。

目次

- 絹本着色楊柳観音像…………… 1
- 資料紹介・朝鮮系仏画の網目について…………… 2～3
- 資料紹介・草場珮川画 古賀精里賛「古梅園」…………… 4～5
- 佐賀県の考古学史Ⅰ 一松尾慎作…………… 6～7
- 行事のお知らせ…………… 8

資料紹介

朝鮮系仏画の絹目について



現在、県内で6点の朝鮮系仏画が報告されている。その内の5点を本館に寄託して頂いているので、以下に簡単な紹介を行いたい。なお絵絹(絵の描かれている絹)の絹目については、1cmあたりの数である。

1. 絹本着色阿弥陀八大菩薩像 掛幅装 一幅一鋪
 広福護国禅寺蔵 高麗時代(13世紀)
 法量 縦 153.5cm 横 86.5cm
 絹目 経糸 2本組26本 横糸 27本

本図は、絹の断断、顔料の剥落が著しいが、中尊と八大菩薩の均整がとれ、如来赤衣に施された金彩の円満文も鮮やかで、朱暈を施すなど、往時

が偲ばれる優品である。

2. 絹本着色楊柳観音像 掛幅装 一幅一鋪
 鏡神社蔵 高麗時代(14世紀)
 法量 縦 419.5cm 横 254.2cm
 絹目 経糸 2本組26本 横糸 36本

本図は、高麗仏画遺品中最大のもので、県内随一の仏画である。通例とは異なり、主尊は、左向きに善財童子と向かい合っている。金泥を多用した彩色法や、柔らかな描線など、優美な画趣を醸している。

3. 絹本着色釈迦三尊及び比丘像 掛幅装 一幅一鋪
 広福護国禅寺蔵 李朝時代前期
 法量 縦 168.8cm 横 57.3cm
 絹目 経糸 2本組13本 横糸 24本
 彩り豊かな本図は、各尊が、画面一杯に、無機的に配置され、我国とは異なった感覚をもった画工による工房製作を思わせる。糸太な平織り絹が使われている。

4. 絹本墨画淡彩楊柳観音像 掛幅装 一幅一鋪
 広福護国禅寺蔵 李朝時代前期
 法量 縦 114.3cm 横 63.7cm
 絹目 経糸 2本組17本 横糸 26本

本図は、本県に伝存する楊柳観音像では、前掲鏡神社本に次ぐものであるが、彩り豊かな鏡神社本とは異なり、全体が水墨手法で描かれている。(表紙参照)

5. 絹本着色善財童子歴参図 掛幅装 一幅一鋪
 広福護国禅寺蔵 李朝時代前期(16世紀初頭)
 法量 縦 105.8cm 横 59.0cm
 絹目 経糸 2本組21本 横糸 24本

本図は、華嚴経入法界品所説の、善財童子が、功德を説うために、正覚者を求めて、各地を歴参するという場面の内の三景を、上・中・下に描いたものである。

以上より、大幅の鏡神社本楊柳観音像にすら、絹継ぎの跡が認められないことは、小幅でも通例奇数幅を横継ぎして一鋪とするのが我国の古画の例であることを考えれば、注目に値する。(現在、広福護国禅寺本楊柳観音像及び善財童子歴参図は、はじめから四幅の絹を縦に継いだようになっているが、これは、昭和48年度の修理によるもので、修理仕様書に添付された写真に認められる巻折れを継ぎ、均衡をとるために行われたものと思われる。)

今回、我国の古画の時代考証に、1cm当たりの絹糸の数が参考とされるようになってきたことを受けて、本館預りの朝鮮系仏画を見てみたが、今後の研究の一助となれば幸いである。

なお、五幅中で、釈迦三尊及び比丘像は、通例着衣用に使われる平織り絹に描かれていることも注意しておきたい。(学芸員 大隈博文)



絹本着色阿弥陀八大菩薩像



絹本着色釈迦三尊及び比丘像



絹本着色楊柳觀音像(鏡神社藏)



絹本着色善財童子歷參圖

資料紹介

草場珮川画 古賀精里賛「古梅図」

紙本墨書 130.2×58.5 掛幅装

賛に「回

玉堂師玉堂師有否玉堂貯瓊姿老開顔

眇清浅水鏡幹澹凌水雪時目下新

吟空即色身前慧業盡來詩畢竟

一番雪白勢無由洗去墨淋漓

精里戲題師印

印章 関防印 白文長方印「高裕」

落款印二顆 ①白文方印「古賀 ②「淳風
摸」 劉氏」

古梅図落款

「辛未季夏写於對馬

旅寓 珮川 回

(印文不詳)

左下に落款印二顆 ①白文方印(印文不詳) ②「棣芳」

この画幅は、珮川の落款「辛未季夏写於對馬旅寓」からすれば、辛未は文化8年(1811)で、この夏対馬の旅館で描いたものである。この時珮川は24歳、賛の古賀精里は61歳である。文化8年は、朝鮮通信使が我が国に來訪した第12回目の年である。

朝鮮通信使は、慶長12年(1607)呂祐吉を下使として467人の使節団が來朝し、徳川秀忠に国書を呈したのを始め、以来11回までは大坂城で修好の礼が行われたが、第12回目は経費の都合で対馬で行われた。この時の朝鮮国の正使は金鳳喬で、文化使節として金清山、李伯翁、李太華、李菊隱など総勢336名である。日本からは上使小笠原大膳太夫、坂城中務太夫を始め文化使節として古賀精里、樋口溜川、草場礎助(珮川)が従っている。珮川は、文化7年(1810)10月25日佐賀を立て、江戸昌平營の師、古賀精里(1750~1817)のもとに行き、翌8年、一行とともに対馬に向かった。その時の日記に「附驥日録」(文化7年)、「附驥日記」(文化8年)がある。対馬での朝鮮通信使との接衝の事情は「津島日記、上・中・下」(文化8年5月1日~同7月4日)に詳細に述べている。

昌平營儒官・古賀精里から直接選ばれて、対馬に同行した珮川は24歳の若さであり、彼にとっては、今後の將來を左右する重大な役割を担った随行であった。

「津島日記」には、対馬の風俗、地形に至るまで耳目を属した様子をうかがうことが出来る。

なお、この日記は「草場珮川日記、上巻」(昭和53年5月14日発行、監修・三好不雄、校註・解題・三好嘉子、発行所・財団法人西日本文化協会)に影印本として収録されている。

日記によれば、朝鮮通信使への国書の回答文を精里から命じられて起草し、また、彼らとの筆談でも我が国の文化人の一人として、大きな荷を負って、それを見事に果たしている。

通信使が持参した朝鮮国王の贈物は虎皮7張、豹皮10張、人參30斤、大繡子、大緞子などで、我が国からは屏風10双、鞍10口、色羽二重、奈良晒布、料紙、硯箱その他数々を贈っている。その間の国書の受取、回答の儀式、文化使節団との筆談などの事情を、日記は細かく伝えている。

日記6月7日の項に「島民ノ求ニ応シテ書画ス」とあり、6月24日には「午後客館へ使ス、昨日韓客吾師ノ墨迹ヲ求タルヲ書送セラルルナリ、余モマダ需ラシ水墨数幅ヲ齎ラス。……」とあることから、島民や使節団とも互いに書画を交換していることがわかる。

この画幅にある古賀精里の賛の冒頭「玉堂師玉堂師有否玉堂云々」の玉堂は、通信使との儀式や親善交歓が行われた「以酛菴」の僧のことで、6月26日の項には、以酛菴の景観とそのいわれを述べている。日記の5月2日の「府中懐図」からみると、波戸の広場からすぐ西側の山側に位置し、周りは二重の石垣が巡らされ、上段の石垣は「石垣高三丈程」とある。門から入れば玄関、厨裡、方丈、客殿、式台、庫蔵がある。丁酉の年に建ったのでこの名があり、珮川は「明曆中二建ナルベシ」と推測している。

この菴の住職については、「余カ相知レルハ一僧玉堂、練首座ノミ、此外一人モアリシヤ云々」とあって、玉堂は、この菴の練首座であることが解る。練首座とはどのような役か不明であるが、碩学(五山から選ばれて朝鮮修文職に任じ、朝鮮との外交に当たる役)の従身と思われる。時の碩学は天竜寺の龍潭和尚であった。古くは、亮茶翁の弟子で「亮茶翁伝」を書いた大典類常も相国寺から碩学としてここに派遣されている。

この画幅は、珮川のお梅図に古賀精里が以酛菴の玉堂のために賛をして贈った、いわれあるものである。珮川の画歴を知る上では稀にみる古梅図といえる。

珮川の「日新私乘」によれば、文化5年(1808)9月15日、「学画、縹浦之女綿苜亦学画、尤善竹菊」とあって、珮川が江越縹浦とその娘縹苜から画を学んでいることを記している。更にこのことは「対礼余濼」(韓国の通信使との筆談記)6月24日の客館筆語に「於我心有班駁、僕蚤歲失怙、長崎人有江越縹浦(雄吉郎)者、嘗与僕父為執、有匪他之契誼、至今遺愛及解、居趾雖遠、音好不絶、相視猶父子、縹浦善画、僕之紙墨、亦有由焉云々」(自分にとって大変恥ずかしい話ではあるが、自分は幼い時に父を亡くした。長崎の江越縹浦は、父のかつての友人であり、今でもその契りは続いて自分にも及んでゐる。住居は遠方であるが、連絡はあつて親子のような親しみ

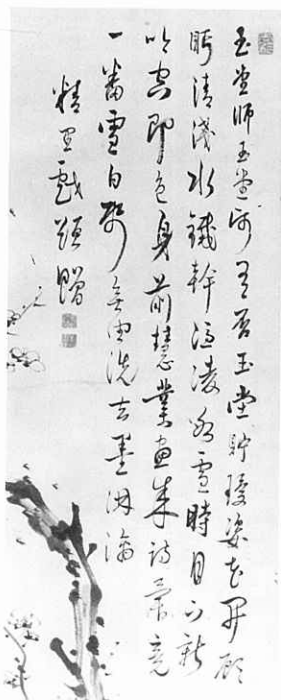
を持っている。緒浦は画を善くし、自分の墨画も見てもらっている。これは又いわれ深いことである。>と語っている。又、この筆談の中で泊翁は、珮川の詩を「絶佳」とほめ、清翁は、珮川の画法を「神異」といい、「天下奇才」とも評している。

この画幅は、朝鮮の通信使との関係で描かれたものとして由緒が深く、筆力といい、構図といい、珮川の画歴からみた一番若書きの作例として、資料的にも極めて貴重な作品である。

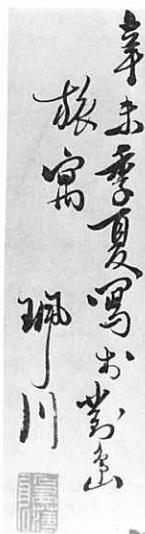
(学芸課長 尾形善郎)



草場珮川画古賀精里賛「古梅図」



(古賀精里賛)



(草場珮川落款)



① はじめに

佐賀県における原始・古代の研究は、吉村茂三郎（昭和28年7月没）・松尾楨作（昭和35年3月没）・龍溪顕亮（昭和36年11月没）・木下之治（昭和55年2月没）・七田忠志（昭和56年9月没）氏等の、学史的業績を踏まなければならない。

吉村茂三郎は、唐津地方を中心に考古学的発掘調査を実施し、その後継者である龍溪顕亮は吉村と同様に、県内で確認された帯隈山神龍石（佐賀市）の調査や柏崎貝塚（唐津市）の発見等につくし、松浦史談会の発展にも寄与した。松尾楨作は県内における先史時代の集積を試み、木下之治は松尾以後の佐賀県における原始・古代の解明と、文化財保護行政の中心的役割をなした。七田忠志は東京において、本格的な考古学研究方法を学び、中央学会での活躍と九州における編年学的研究に大きな足跡を残した。

② 松尾楨作

松尾楨作は明治26年2月、現在の佐賀県三養基郡中原町に生まれ、明治45年、佐賀師範学校卒業と同時に教員として職に奉じるが、教職のかたわら県史跡名勝天然記念物調査員や県郷土教育調査委員・佐賀県史編纂委員等を委嘱され、終戦直後の昭和20年10月から22年4月まで中原村長に選任されている。

その後、昭和23年から県社会教育課嘱託に任ぜられると、県下の文化財保護行政の中心となり、県内各地の遺跡の発掘調査にたずさわった。昭和27年には佐賀大学講師を兼務し考古学を担当すると昭和30年代以降の考古学研究の中心となる若い研究者の育成にも力を注いだ。とくに松尾は、玄界灘の福岡県から佐賀県に主要な分布を示す「支石墓の研究」に力を注ぎ、この支石墓の研究の成果により昭和30年度西日本文化賞の受賞へと、結びついていく。

松尾楨作の多くの業績の中で、昭和10年6月に刊行された「東肥前の先史遺跡」は、明治45年から教職のかたわら発掘調査や踏査による成果をふまえて集積した最初のもので、松尾のよき協力者であった藤谷庸夫・古賀孝の援助により作製された。とくに「東肥前の先史遺跡」は、『中原村の史話伝説』（大正14年5月刊）や古賀孝との共著である「古代東肥前研究」（大正14年10月刊）がその原本とされ、松尾の初期の考古学研究には古賀孝の影響が大であった。また、七田忠志の踏査記録も随所に引用してあり、松尾・古賀・七田の業績の集積でもあった。この著書は、大きく石器時代（縄文時代）と弥生時代に時代区分され、戦場ヶ谷遺跡の調査や有明海沿岸に点在する貝塚に注目し、春振山麓の南側裾野に点在する甕棺や石棺、ここから出土する青銅器やその他の副葬品を細かに記録として留めている。後編には、三養基郡・神埼郡・佐賀郡・佐賀市・小城郡にまたがる踏査記録を記載し、今後の調査の問題提起としている。この東肥前の考古学的研究は、学術的報告を目的としたものではなく、考古学的常識普及の遅れが目だつ佐賀県の実体を記録すべく試みられたものであって、その視点を春振山麓南麓の三養基郡・神埼郡の諸遺跡を対象としている。また、後の踏査のための案内書でありたいという念願は、目達原古墳群の発掘調査や三津永田遺跡の発見、あるいは戦後の貴重な弥生時代から古墳時代の遺跡の確認へと受け継がれてゆく。一方、松尾はこの著書の中で「歴史的研究は、物語・伝説・神話の域から史実討究の時代に入り、古文書や遺物・遺跡の踏査研究が必要である」と強調し、「遺跡が物質文明の犠牲のため破壊されるのを黙視する事はできない」という考えを述べており、このことは原始・古代研究と戦後たずさわる文化財保護行政のなかの基本的な考えとなっている。

その後、松尾の原始・古代研究の発表の場は、戦後に来ておよぶ「佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告書」がその主体となる。

松尾の学問的研究の成果とその集積は、支石墓の研究による昭和30年度西日本文化賞の受賞と、刊行物として「佐賀県下の支石墓」佐賀県文化財調査報告書第4集、昭和30年・『佐賀県考古大観（先史・原始時代編）一遺跡・遺物より見たる古代佐賀一』昭和32年・『北九州支石墓の研究』松尾楨作先生還暦記念事業会 昭和32年、の著書がある。

「佐賀県下の支石墓」は、葉山尻支石墓及び五反田支石墓・さきがしら支石墓、さらには消滅した徳須恵支石墓やその他の県内に分布する支石墓について報告したものである。論叢の「北九州支石墓研究の沿革と県下の支石墓調査」では、北九州支石墓の研究過程と県内での調査経過を記し、昭和13年頃、山口良吾・吉村茂三郎・龍溪顕亮氏等によって発見された徳須恵支石墓の埋葬形式に注目した、鏡山猛の論文「原始箱式棺の姿相」史観第

27集昭和17年 に始まるとしている。このことが昭和25年の徳須恵支石墓復原想像図となり、これを契機として昭和26年に唐津市葉山尻支石墓が発見され、さしがしら支石墓の発見や五反田支石墓群の発見へと継続される。次の『県下の支石墓調査』では、葉山尻支石墓・五反田支石墓・徳須恵支石墓・さしがしら支石墓の環境や発見過程・遺跡の現状・造構の状況・出土する遺物等について写真・図版を加えて、報告をおこなっている。さらに未調査のため、支石墓の参考地として唐津市久里の岩丸遺跡・三養基郡上峰村の船石遺跡・神埼郡千代田町の大石遺跡については、その概要を記している。

このように「佐賀県下の支石墓」は、当時の学会の協力のもとに実施された発掘調査の成果を集録したもので、佐賀県内では初めての大規模な報告書であると共に、長崎県・熊本県・大分県においてあついで発見される支石墓が注目される要因を作ったといつてよい。しかし、松尾は病気のため閉病生活中の脱稿であったことから、佐賀県内に限定した論究には満足せず、「佐賀県下の支石墓」という成果を基本として次の「北九州支石墓の研究」へと継続されるのであった。

「北九州支石墓の研究」は、前記の『佐賀県下の支石墓』の著書の中で論究できなかつた北部九州全域に論を展開したもので、支石墓研究に情熱を燃した松尾にとって最後の労作となる。この「北九州支石墓の研究」は、前編・中編・後編の三部から構成されており、前編では支石墓の研究やその特徴と分布について記している。中編では、福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県の支石墓についてその概要を遺跡ごとに調査報告の形で記載し、未調査については「参考地」として記録に留めて今後の問題提起をおこなっている。

後編はそれまでの調査にもとずいた考察編で、北部九州に点在する支石墓群の実体をある程度明確にしたものとして注目されるが、学術的な発掘調査の少ない現状をふまえて、補正の必要性をも指摘していることは賢明といえる。考察編は、①支石墓の外部施設・②支石墓の内部施設・③支石墓の副葬品と献供用土器・④支石墓の性格・⑤支石墓と葬制・⑥墓制史上より見たる北九州支石墓・⑦北九州支石墓と南朝鮮盤形支石墓・⑧支石墓の編年・⑨日本の黎明と支石墓社会、の九章から構成されており、松尾がそれまでの研究の成果をまとめた試案としている。

とくに松尾は、三上次男が当時の東南満洲で試みた支石墓の編年と対比させ、内部主体や副葬品及び献供土器の時期によって北九州の支石墓の編年を類似するとし、これまでも弥生時代中期に限定されていた支石墓群を、五反田支石墓・葉山尻支石墓の発見に伴って弥生時代前期にまで古く位置づけている。また、原山支石墓の発見では、内部主体の土壌から出土する献供土器の一つの丸底の埴の特色から、縄文時代晩期にまで支石墓の開始期

を早めた。支石墓の形態は弥生時代中期末まで確実に継承されるが、後期になると支石墓の数は著しく減少し、高塚式古墳の伝播によってその形態は消滅するとしている。

松尾はこの著書の最後に、「北九州支石墓は、弥生式文化期という未曾有の社会経済変革期に行われた墓制の一型式である。即ち純石器の採集経済より金属初現の農耕経済社会への転移期に於て、朝鮮の金属文化・水田農耕文化と略々時を同じうして伝播し来たる墓制であるが、世界的巨石文化としてのドルメンの範囲に属しながらも、朝鮮の基盤式支石墓と共にその年代に於てもまた形式においても特異の存在である。然もまた外部施設に於て朝鮮の基盤式支石墓第二形式に類しながらも、その大部分は内部主体に於て種々雑多の様相を呈し、固有の墓制とも習合して、時代的に地方的に異なる分化を示している。」と支石墓の意義づけをし、さらに「北九州支石墓研究の重要性は、家族墓的族長墓的性格や巨石文化の日本墓制史上の位置づけにあるのみではなく、支石墓を作った社会所謂部落小国家的社会が、わが建国前夜に於て如何なる文化的様相を持っていたかの究明にある。やがて国家統一の胎動期に於けるこの地方の支石墓文化の文物が如何なる程度のものであったか、富の蓄積・職業の分化等が支石墓に如何に反映していたかの究明もより重要である。」と支石墓造営時の時代背景を記している。

『北九州支石墓の研究』と時を同じくして、古代史を学ぶ初心者を対象とした平易な同記の『佐賀県考古大観（先史・原始時代編）』が刊行される。この種の一般を対象とした教養書は初めての試みであった。また、県下全域の原始・古代を要約して記載したこの著書は、研究者にも多く利用され、佐賀県の原始・古代遺跡を知る手引き書としても重要視され、各種論文にも引用されたのである。とくに、第五編の「原始時代の佐賀」では、松尾自身いままでもあり論究を加えていなかった時代で、佐賀県の古墳時代について集約を試みている。その中でも、古墳の分布と主な副葬品について細かく記録にとどめ、主要な古墳21基については別に章を設けてさらにくわしく論を進めている。また、佐賀の古墳文化が、大陸文化と大和文化の影響を受けて展開する状況について、弥生文化の継承として記している。松尾自身、県下を対象とする考古学の総合的な著書は、この『佐賀県考古大観』が最初で最後となった。晩年は、研究者として最も充実した時期であったが、病氣との闘いの中で松尾の学問は集大成されていた。

松尾慎作は昭和35年3月に没するが、一年後の昭和36年8月に鏡山猛・七田忠志をはじめとする学恩を受けた人々によって、保存されていた未発表の原稿に手を加えた「佐賀県考古大観—歴史考古学上より見たる上代佐賀—」という、先史・原始時代編の続編が刊行された。（資料係長 森 醇一郎）

行事のお知らせ (昭和59年度)

常 設 展

展 覧 会 名	会 期	内 容	会 場
佐賀県の歴史と文化展	4月1日 ～3月31日	佐賀県の地質や自然、先史時代から近代にいたる歴史と文化について、自然史・考古・歴史・美術工芸・民俗の各部門について、系統的に資料を展望	博 物 館
近代の美術・工芸	4月1日 ～3月31日	郷土出身作家の彫塑・陶磁・染織・金工などの代表的工芸品をはじめ百武兼行・久米桂一郎・岡田三郎助から現代に至る美術作品、副島蒼海、中林梧竹などの、近代の書を紹介。	美 術 館

企 画 展

展 覧 会 名	会 期	会 場	展 覧 会 名	会 期	会 場
伝統工芸30年の歩み展	4月21日 ～5月27日	美術館	佐賀新聞学生書道展	9月23日 ～9月30日	美術館
光 風 会 展	6月1日 ～6月10日	美術館	よみがえれ佐賀展	9月29日 ～10月10日	博物館
佐賀美術協会展	6月15日 ～6月24日	美術館	日 本 の 美	10月6日 ～11月4日	美術館
第 68 回 二 科 展	6月29日 ～7月8日	美術館	中里無庵・太郎右衛門父子展	10月20日 ～11月4日	博物館
佐賀県写真協会展	7月11日 ～7月15日	美術館	佐賀県高等学校芸術祭 美術・書道展	11月11日 ～11月18日	博物館 美術館
青華展並びに九州正筆会展	7月11日 ～7月15日	美術館	佐賀展美術展	11月28日 ～12月9日	博物館 美術館
独 立 C S 展	7月18日 ～7月22日	美術館	エ マ 会 展	12月12日 ～12月16日	美術館
書作家協会展	7月25日 ～7月29日	美術館	さが行動展	1月15日 ～1月20日	美術館
勤 労 者 美 術 展	8月1日 ～8月5日	美術館	肥前の中世美術	2月2日 ～3月10日	博物館
E V E N T ' 84 絵画展	8月22日 ～8月26日	美術館	書 初 書 道 展	2月13日 ～2月17日	美術館
七 夕 書 道 展	8月29日 ～9月2日	美術館	佐賀大学卒業制作展	2月20日 ～2月24日	美術館
東 光 会 展	9月12日 ～9月16日	美術館	九州グラフィックデザイン展	2月27日 ～3月3日	美術館
理 科 作 品 展	9月19日 ～9月26日	博物館	第 15 回 き し ま 展	3月6日 ～3月10日	美術館
九州新工芸展	9月21日 ～9月30日	美術館	久富邦夫回顧展	3月19日 ～3月24日	美術館

※都合により上記計画を一部変更することがあります。

博物館・美術館報	第 64 号
発行年月日	昭和 59 年 3 月 1 日
編 集	野 村 綱 明
発 行	佐賀市城内1丁目15～23 佐賀県立博物館 佐賀県立美術館
印 刷	佐賀印刷社